

介護職員自己評価表

2026年4月10日

事業所名	特別養護老人ホーム うすきの里
------	-----------------

	正社員	非常勤社員
社会福祉士	1人	
介護福祉士	33人	
あん摩・マッサージ師	1人	
介護支援専門員	5人	
実務者研修修了者その他	20人	
看護師・准看護師	5人	1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よくできている	なんとかできている	あまりできていない	ほとんどできていない	備考
前回の課題に関する改善	12.1%	59.5%	28.4%	0.0%	

前回の改善計画
入居者が穏やかに生活できる環境整備を重点課題とし、認知症ケアとして声掛けの強化、回想療法等の心理療法の活用、残存機能を生かした生活リハビリを計画的に実施した。日常的な短い会話を重視することで情緒の安定と安心感の向上を図った。一方、スタッフ間でケアの質に差異がみられたため、社内外研修を通じた技術標準化とスキル向上を推進した。また、AI解析による表情・行動データの把握を活用し、状態変化の早期発見とケア内容の見直しにつなげた。さらに、家族参加の機会を確保し、生活歴を踏まえた個別支援を強化した。これらの取り組みにより一定の成果が得られたが、引き続きケアの均質化と専門性向上が求められる。
前回の改善計画に対する取組み結果
入居者が孤独を感じず生活できる環境整備を重視し、日常的な声掛けや会話に加え、近くに「ひと」の存在を感じられる関わりを推進した。その結果、生活リズムは概ね整い、昼夜逆転などの睡眠障害は減少した。一方で、昼間に眠気がなく夜間に覚醒が続く入居者もみられたため、入眠時間の調整や高照度光治療を用いた体内時計の調整支援を実施した。ミッケルアート回想療法や回想ライブラリーの提供により情緒の安定を図ったが、レクリエーションに苦手意識を持つスタッフもあり、OJTを通じたスキル向上とケアの均質化が課題として示された。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)	よくできている(60以上)	なんとかできている(50~59)	あまりできていない(40~49)	ほとんどできていない(39以下)	合計
SECTION 1 対象者の接し方や態度について	12.1%	63.6%	24.2%	0.0%	100%
SECTION 2 仕事上の態度について	9.1%	63.6%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 3 食事について	12.1%	60.6%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 4 移乗や移動について	15.2%	54.5%	30.3%	0.0%	100%
SECTION 5 排泄について	9.1%	63.6%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 6 入浴について	12.1%	57.6%	30.3%	0.0%	100%
SECTION 7 着替えや整容について	9.1%	63.6%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 8 服薬について	15.2%	63.6%	21.2%	0.0%	100%
SECTION 9 意思疎通について	12.1%	54.5%	33.3%	0.0%	100%
SECTION 10 行動障害について	18.2%	45.5%	36.4%	0.0%	100%
SECTION 11 普通の生活やアクティビティについて	9.1%	63.6%	27.3%	0.0%	100%

自己評価及び改善が必要な事項
入居者が孤独を感じず穏やかに生活できる環境整備を重点課題とし、日常的な「ちょっとした声掛けや会話」を重視した支援を推進した。近くに「ひと」の存在を感じられる関わりを意識することで、生活に安心感と生活感をもたらすことを目指した。その結果、多くの入居者で生活リズムが整い、昼夜逆転等の睡眠障害は減少した。一方、事例として、昼間に眠気がみられず夜間に覚醒が続く入居者が確認され、入眠時間の調整や日中活動量の確保に加え、高照度光治療を実施したところ、数週間で夜間の覚醒が減少し、生活リズムが改善した。このように、個別性に合った体内時計調整の支援が一定の効果を示した。また、ミッケルアート回想療法や回想ライブラリーを活用し、過去の記憶を語る機会を提供することで情緒の安定を図った。しかし、レクリエーション支援に苦手意識を持つスタッフもあり、ケアの質にばらつきが生じる課題が明らかとなった。このため、OJTを中心とした実践的指導体制を整備し、スタッフのスキル向上とケアの均質化を図る必要性があった。

係長 大坂 高広

外部評価者
認知症ケアに関する理解を深めるため、心理的課題への対応力を高めてこられた点がとても印象的でした。睡眠データを活用して入眠時間を調整し、残存機能を生かした静的・動的ストレッチを取り入れるなど、入居者の生活リズムを整えるための工夫が随所にみられます。実際に、夜間の覚醒が続いていた方が、日中のストレッチと入眠時間の見直しを組み合わせることで、徐々に眠りが安定していった事例もあり、取り組みの効果がしっかりと表れていました。また、写真や動画、絵を使った回想療法、小集団での体操やヨガサイズが日課として定着しており、入居者の皆さんが楽しみながら参加されている様子が伝わってきました。一方、コミュニケーションが図れる入居者が多い環境であるため、経験の浅い職員の中には会話の進め方に迷いが生じることもあり、レクリエーションへの苦手意識とあわせて不安を抱える場面がみられました。こうした課題に対し、メンターや主任による指導、人事部との面談など、多方面から支援を行っている点はとても良い取り組みだと思います。負担感は一程度軽減しているものの、主任によるスーパービジョンは、今後さらに充実させていく余地がありそうです。総合的には、入居者の生活を豊かにするための工夫が多く、家族との関係性も良好で、地域に根ざした事業所として着実に取り組みを進めておられることが伝わってきました。今後のさらなる発展を期待しています。

〒891-0151 鹿児島市光山2丁目3-5
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
(博士)社会福祉学 岩崎 房子

